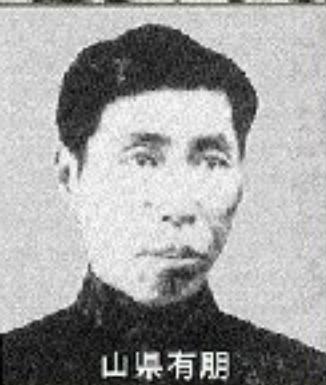




“寸言人を活かす”松陰の言葉
による、維新志士人物評

松陰を学ぶ要反報

福本義亮著 限定五百部復刻（番号入） マツノ書店



志道又三郎

松陰曰「宥陰當今文宗、學者所_レ矜成_二而吾讀_三其大統歌_一有_レ言云々。」(幽室文稿)

號豐浦、花廼屋社中俳人、瀬能吉次郎之從弟。

野山同獄。

松陰曰「其爲_レ人廉潔、決非_二惡人_一、然るに_〔此地_〕に來る甚疑問云々。」(安政元年十一月野山獄より家兄宛書柬)

下曾根金三郎

西洋砲術家にして佐久間象山砲術之師、號桂園。

松陰曰「浦賀之一件、下曾根「ペトロン」備、其拙、論なし云々。」(嘉永六年八月江戸より家兄宛書柬)

庄田長之助

會津之人。

嘉永五年正月訪問。

澁谷某

松陰と江戸傳馬町同獄、後日命と共に八丈島に流さる。

新右衛門

野山獄胥、本姓肝煎、俗稱衆斤叟。

松陰野山在獄

総目次

吉田、杉両家累系

松陰先生年譜略

松下村塾にて教を受けし著名の門生

松陰先生に学を授けし人々

松陰先生交友録 いろは別

同 上 追 補

附 録

允可三重極秘伝々統

免許及目録伝授

兵学入門起請文

松陰先生遺著目録解説

松下村塾改修記

松陰神社創建由来 附神寶由来

長藩殉難贈位者名録

松陰先生交友録 索引

登場人物の一部

あ

赤川淡水／赤川又次郎（又太郎）／赤根武人／
赤根宰輔（才助）／栗田法主／栗屋半次郎／栗
屋彦太郎／栗屋與七／阿座上正藏／阿部善
七／阿久津彦九郎／阿豊／有吉熊次郎／有吉
市郎兵衛／有吉市郎左衛門／秋良敦之助／秋
良雄太郎／安積良齋／安藝五郎（五藏）／天野
精三郎／會澤恒藏／鮎澤伊太夫／青木研藏／
足代弘訓／蟻川賢介（賢之助）／雨森芳洲／荒
木權之進／荒谷貞次郎／淺野小次郎／秋本文
字兵衛／赤井巖三／天野九郎右衛門

い

井上與四郎／井上莊太郎／井上莊三郎／井上
七郎二郎／井上喜左衛門／井上奨輔／井上簀
之助／井戸對馬守覺弘／井伊直弼／（以下略）

『吉田松陰全集』の最終巻についてい
る「関係人物略伝」との相違は次の通
りである。

①「略伝」が二三五名なのに対し、
本書は六七八名と約三倍の人物をと
り上げている。

②一人一人の記述は短いけれど、
「松陰曰……」という珠玉の言葉が
各所にちりばめられているのが最大
の魅力となっている。

■体 裁 B 6 判二九四頁

函入上製本

■定 価 四、〇〇〇円（〒310）

■特 価 同封の『吉田松陰詩歌
集』パンフの裏面をご
覧下さい

■発 売 本年9月中旬

徳山市銀座二の二三
☎七五〇（八四）二二五
マツノ書店



六七八名の松陰先生遺文人名録

萩郷土文化研究会会長
萩松陰神社総代

田中助一

吉田松陰は若くして逝去した人であるが、多くの人と関係があったので、松陰のことをよく知ろうと思えば、その関係人物のことを知っておく必要がある。その意味で山口県教育会が『吉田松陰全集』（全十巻）を岩波書店より刊行した時には、昭和十一年四月に刊行したその第十巻の中に「関係人物略伝」が玖村敏雄委員によって書かれて居り、非常に良い参考資料になっている。そのとき玖村委員が執筆の参考に供された諸書の中に、福本義亮（号椿水）氏の著わされた『松陰先生交友録』と、『吉田松陰の殉国教育』がある。

『松陰先生交友録』は、昭和三年十月二十五日に、神戸市の惜春山荘から刊行された、四六判仮綴二七〇頁の本であり、名著『吉田松陰』の著者徳富蘇峰氏が題字を揮毫している。惜春山荘は福本氏の家であるから、この本は自費出版と思われるが、間もなく無くなり、今日では稀覯本きこうほんとなっている。

福本氏は明治二十年（一八八七）三月十五日に山口県阿武郡椿郷東分村（現萩市椿東）に生まれた。即ち吉田松陰と同郷の後輩で、小学校及び中学校で松陰の事蹟を知った。萩中学校より東京外国語学校佛蘭西語科に入り、卒業後警察官となった。神戸市水上警察署長を最後として実業界に入られ、神戸市商業会議所専務理事になられた。多忙の中にも漢詩を作ったり、裏千家流の茶道を学んだり、郷土資料の蒐集にはげまれて、二十数冊もの著書を出版され、昭和三十七年十一月二十五日に数え年七十七歳で逝去された。

『松陰先生交友録』の内容は、その凡例に福本氏自身が次のように書いて居られる。

本書仮称して松陰先生交友録と謂ふ。然れども本書執筆の動機は、既に序文に於いて記述せる如く、松陰先生を中心としてその周辺に来往せる諸人物を精研網羅せんとするにあれば、単に師友関係者のみならず、門生其他先生の文献中に見えたる諸人物を随読随集せるものにして、寧ろ松陰先生遺文人名録とも謂ふべきものなり。

今年は吉田松陰先生生誕百六十年に当るので、萩市でも諸種の行事が計画されている。この好機会に『松陰先生交友録』が復刻されることは一入意義が多いと思う次第である。